

吉備池廃寺発掘調査報告

— 百済大寺跡の調査 —

第Ⅰ章 序 言

本書は、奈良県桜井市吉備（旧十市郡香久山村大字吉備）の吉備池廃寺において、奈良国立文化財研究所（2001年度以降は奈良文化財研究所、以下同じ）と桜井市教育委員会・桜井市文化財協会が、1996年度から2001年度まで実施した発掘調査成果をとりまとめたものである。

吉備池廃寺は、大和三山のひとつである香具山の山塊から東北東へ約1 km離れた「吉備池」吉 備 池のほとりに位置する。吉備池は、平坦地の周囲に築堤してつくられた、いわゆる皿池とよばれるたぐいの農業用溜池である。この種の溜池は、大部分が近世初期の築造にかかることが明らかにされており、吉備池もその例に漏れないだろう。ただ、池堤の北辺は正方位に対して大きく振れ、南辺も屈折するなど、特徴的な形態を示している。また、その位置も、盆地内のほかの溜池の多くが条里地割と密接に結びついているのと異なって、条里と整合せず、十市郡路東二十五条三里二・三・十・十一坪の四坪にまたがる。

1 調査の経緯

吉備池の東南部を中心として、飛鳥時代の瓦が散布することは、以前から知られていた。そして、先述のような池堤南辺の不自然な形状や、その断面観察に基づき、これを創建時の吉備「吉備寺」説寺の跡とする見解が、前園実知雄によって提示される。²⁾しかしながら、発掘調査を経ていないこともあって、広く寺院跡としての共通理解を得るまでには至らなかった。

一方、吉備池の西北西約700mには、古くから吉備寺跡に比定されてきた（前園は移転先と考えた）「大臣藪」があるが、それが中世城館であって、寺院の跡ではないことから、吉備寺の存在そのものを疑う説があらわれる。なかでも大脇潔は、「大臣藪」をはじめとする過去の吉備寺比定地の遺構・遺物の検討を通じて、吉備氏の氏寺としての吉備寺の存在を示す徴証は、実際にはほとんどないことを明快に論じた。³⁾

その際に、大きな拠り所の一つとなったのは、香具山北西麓の橿原市木之本町から、吉備池と同範の瓦が比較的まとまって出土する、という事実であった。これを木之本廃寺と仮称しているが、両者のあいだに強いつながりがあったことは疑いない。そして、吉備池については、寺院跡ではなく、木之本廃寺の瓦を生産した瓦窯跡とみる説が有力となっていたのである。瓦 窯 説

こうしたなかで、桜井市農林課により、吉備池の北側と西側から進められていた池堤の護岸

工事が、東南部の瓦散布地に迫りつつあった。そこで、まず工事に先立って、こういった遺構が存在するかを確かめるため、1996年度に、奈良国立文化財研究所と桜井市教育委員会が共同で発掘調査を実施した（飛鳥藤原第81-14次調査、以下、「飛鳥藤原」を省略）。

発掘調査 その結果、当初の予想とは異なって、巨大な金堂基壇を検出し、この遺跡が瓦窯跡ではなく、飛鳥時代の寺院跡であることが判明する（過去の吉備寺比定地と区別するため、「吉備池廃寺」と命名）。これによって、当該部分の護岸工事は中止され、ひきつづき、伽藍の概要と寺域確認を目的とする計画調査を、2000年度まで実施することになった。以後、1997年度には塔と南面回廊（第89次調査）、1998年度は南面および西面回廊（第95次調査）、1999年度には東面回廊と僧房ほか（第105次調査）、2000年度は中門と僧房の調査（第111次調査）をおこなっている。

各年度の調査では、おもな成果が明らかになった段階で、報道発表と現地説明会を実施し、終了後の整理を経たのちに、『奈良国立文化財研究所年報』（2000年度以降は『奈良文化財研究所紀要』）に概要を報告した。ただし、それらは、あくまで各々の時点での理解であり、現在の解釈とは異なる部分もある。本書をもって、現時点での正式な見解とされたい。

一方、そうした計画調査と並行して、民間の住宅建設等にもなう事前調査も、桜井市教育委員会と桜井市文化財協会の手でおこなわれた。1998年度の僧房（桜井市第9次調査）、2000年度の北外周部（桜井市第11次調査）、2001年度の南外周部（桜井市第12次調査）、2002年度の東外周部（桜井市13次調査）の発掘調査がそれにあたる。このうち、桜井市第11次・第12次調査については、桜井市教育委員会から概要報告が刊行されている。⁴⁾

なお、吉備池の一带は、遺跡地図に記載された周知の遺跡（吉備池遺跡）⁵⁾であり、寺院跡と認識される以前から、奈良県立橿原考古学研究所と桜井市教育委員会・桜井市文化財協会の手で発掘調査がおこなわれてきた。とりわけ、「橋本冠名遺跡」の名で実施された南外周部の調査では、藤原宮期の掘立柱建物などを検出するなど、特筆すべき成果があげられている。これらについては、『奈良県遺跡調査概報』および桜井市教育委員会・桜井市文化財協会発行の発掘調査報告書に概要の報告がある。

国史跡指定 そして、一連の発掘調査成果をうけて、吉備池廃寺は2002年3月に国の史跡に指定された。今後、遺跡のさらなる内容解明のための調査研究とともに、遺跡の公有化と整備・活用に向けての計画がすすめられていくことになるが、吉備池廃寺の発見にはじまる一連の調査は、ひとつの区切りを迎えたことになる。その意味でも、将来に向けて、現時点までの成果をとりまとめておくことは重要であり、本書の意義もまさにこの点にあると考える。

1) 宮本 誠『奈良盆地の水土史』農山漁村文化協会、1994年。

2) 前園実知雄「磐余の考古学的環境」『考古学論攷』第6冊、奈良県立橿原考古学研究所、1981年。

3) 大脇 潔「吉備寺はなかった—『京内廿四寺』の比定に関連して—」『文化財論叢 II』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集、同朋舎出版、1995年。

4) 桜井市教育委員会『平成12年度国庫補助による発掘調査報告書』2001年。同『平成13年度国庫補助による発掘調査報告書』2002年。

5) 奈良県教育委員会『奈良県遺跡地図』第2分冊、14-B-24、1971年（1984年と1998年に改訂）。1971・1984年版では遺物包含地、1998年版では集落跡（時代はいずれも縄文後期～古墳）とされている。

2 調査組織

今回報告する調査は、奈良国立文化財研究所 飛鳥藤原宮跡発掘調査部と桜井市教育委員会社会教育課が共同で実施したものと、桜井市教育委員会および桜井市文化財協会がそれぞれ単独で実施したものがある。

前者については、「飛鳥藤原第〇〇次」という飛鳥藤原宮跡発掘調査部の一連の調査次数を使用する。ただし、「飛鳥藤原」は省略する場合がある。一方、後者については、調査主体にかかわらず、「吉備池遺跡第〇〇次」の呼称が用いられているので、便宜上、「桜井市第〇〇次」と表記することにした。

以下、各々の発掘調査の責任者と調査担当者を掲げ、他の関係者は一括して列記する（※は研究補佐員、**は調査補助員）。

奈良国立文化財研究所・桜井市教育委員会の共同調査

調査次数	年 度	所 長	部 長	調査担当者
飛鳥藤原第81-14次	1996	田中 琢	猪熊兼勝	小澤 毅
飛鳥藤原第89次	1997	田中 琢	猪熊兼勝	佐川正敏
飛鳥藤原第95次	1998	町田 章	黒崎 直	西口壽生
飛鳥藤原第105次	1999	町田 章	黒崎 直	小池伸彦
飛鳥藤原第111次	2000	町田 章	黒崎 直	箱崎和久

荒木浩司*、伊藤敬太郎*、井上直夫、小野健吉、加藤貴之*、島田敏男、鈴木恵介*

巽淳一郎、田福 涼*、玉田芳英、千田剛道、寺崎保広、長尾 充、中村一郎、西川雄大*

西村 康、羽鳥幸一*、花谷 浩、播摩尚子*、深澤芳樹、福山比呂美*、松村恵司

水戸部秀樹*、宮川伴子*、村上 隆、毛利光俊彦、安田龍太郎、山下信一郎、渡邊淳子*

奈良国立文化財研究所事務局：櫻井雅樹、吉岡佐和子、木寅貢志、松本 誠、山田昇司

桜井市教育委員会事務局：萩原儀征、清水真一

桜井市文化財協会の調査

調査次数	年 度	理事長	専務理事	調査担当者
桜井市第9次	1998	長谷川明	渡辺実恵	橋本輝彦

桜井市教育委員会の調査

調査次数	年 度	教育長	課 長	調査担当者
桜井市第11次	2000	石井和典	岡田憲三	橋本輝彦
桜井市第12次	2001	石井和典	山添慶司	橋本輝彦

岩崎大介**、小川裕子**、川淵喜通**、後藤浩之**、武富智子**、豊福恵子**、中村真理**

安井隆浩**

事務局：堀尾えい

3 報告書の作成

報告書の作成は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部においておこない、発掘調査終了後の2001年度および2002年度の2年間をあてた。本格的な作業を開始したのは2002年4月以降である。

発掘調査および遺構・史料関係の整理は、遺構調査室と史料調査室が担当し、遺物の整理は、考古第一調査室と考古第二調査室が担当した。また、遺跡の探査は埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室 西村 康、木製品の樹種鑑定は同古環境研究室 光谷拓実がおこなった。石材は同保存修復科学研究室 肥塚隆保、獣骨は同古環境研究室 松井 章の鑑定による。なお、今回は、共同調査での出土遺物に加えて、桜井市教育委員会および桜井市文化財協会の調査で出土した遺物もあわせて整理できた。両機関の関係者に篤く感謝の意を表したい。

報告書の作成にさいしては、各執筆者が整理した内容を編集者がとりまとめ、調査部全体による討議を経て、最終原稿とした。

1. 本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第I章 序 言	小澤 毅
第II章 調 査	小澤 毅・橋本輝彦
第III章 遺 構	
1 遺跡の立地と地形	小澤 毅
2 遺構各説	箱崎和久・橋本輝彦
第IV章 遺 物	
1 瓦 磚	
A 軒 瓦 B 道具瓦など	西川雄大
C 丸 瓦 D 平 瓦	花谷 浩
2 土 器 類	
A 土 器	石橋茂登
B 埴 輪	前岡孝彰
3 石製品・土製品・金属製品ほか	小池伸彦
第V章 考 察	
1 寺名比定とその沿革	小澤 毅
2 伽藍配置の復元	箱崎和久
3 堂塔の建築的考察	箱崎和久
4 出土瓦をめぐる諸問題	花谷 浩
5 藤原京条坊と寺地	小澤 毅
第VI章 結 語	小澤 毅
English Summary	Walter Edwards (天理大学)

2. 遺構・遺物の写真撮影と印刷用原稿の作成は、井上直夫が担当し、中村一郎と岡田 愛が協力した。X線写真の撮影は村上 隆がおこない、小野澤亮子が補助した。

3. 図面・図版・挿図・表の作成は各執筆者が分担してあたり、稲田登志子、乾 陽子、井上富美子、奥村直紀、寛 和也、木瀬智晴、北井 緑、小谷徳彦、阪本美鈴、佐々木聖子、佐々木奈月、嶋岡由美、富永里菜、野瀬倫子、宮原智美、森田和世の協力を得た。
4. 奈良文化財研究所・奈良国立文化財研究所の過去の刊行物に関しては、下記の略称を使用した。機関名についても、以下、奈文研と省略する。

『奈良文化財研究所紀要 2001』	→	『紀要2001』
『奈良国立文化財研究所年報 2000-I』	→	『年報 2000-I』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 IV』	→	『藤原報告 IV』
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 26』	→	『藤原概報 26』
5. 遺構図の座標値は、平面直角座標系第Ⅵ系による。高さは、東京湾平均海面を基準とする海拔高であらわす（日本水準原点：H=24.4140m）。なお、2002年4月1日からの改正測量法の施行にともない、日本測地系から世界測地系へ移行することとなったが、吉備池廃寺の発掘調査はすべて日本測地系によっているので、本書の平面座標も日本測地系で表示し、一部、（ ）内に世界測地系の数値を示すにとどめた。ちなみに、2000年1月に奈文研が吉備池廃寺に設置した基準点Na 190～Na 193を、測地成果2000に基づいて再計算（改算）した結果では、両測地系の差（世界測地系座標値－日本測地系座標値）は、南北方向（X座標）が+346.48m、東西方向（Y座標）が－261.58mである。つまり、当該地域における日本測地系の座標を世界測地系へ変換するためには、X座標に+346.48m、Y座標に－261.58m加える必要がある（X座標、Y座標ともにマイナスの数値のため、Xの絶対値は減少し、Yの絶対値は増加する）。標高に関しては、実質上変化がない。
6. 発掘遺構は、遺構の種別を示す以下の記号と、一連の番号の組合せにより表記した。本書の遺構番号は、飛鳥藤原宮跡発掘調査部が設定した地区割り（『藤原概報 24』1994年、133～142頁）の5AD地区における通し番号となっている。

SA（堀）、SB（建物）、SC（回廊）、SD（溝）、SE（井戸）、SF（道路）
SG（池）、SK（土坑）、SS（足場）、SX（その他）
7. 藤原京の京域は、岸 俊男による12条×8坊説（1坊＝4町＝約265m四方）を越えて広がることが判明している。南北の京極は未確定だが、東西京極の確認をうけて、本書ではもっとも蓋然性が高いと考える10条×10坊（1坊＝16町＝約530m四方）の京域を示した。ただし、混乱を避けるため、条坊の数詞呼称については、便宜的に岸説とその延長呼称を用いている。
8. 7世紀および藤原宮期の土器の時期区分は、飛鳥Ⅰ～Ⅴとあらわす。詳細については、『藤原報告Ⅱ』（1978年、92～100頁）を参照されたい。
9. 本書中での人名は、すべて敬称を省略させていただいた。
10. 註は、各節ごとにそれぞれの末尾にまとめた。
11. 本書の編集は、調査部長 田辺征夫の指導のもとに、小澤 毅がおこなった。